

1. 採点上打ち合わせた事項

今大会も事前にオンライン研修、当日で対面での研修を行い、ルールの確認、及び映像を使っ
ての採点研修により今大会の採点基準の確認を行った。

【個人DB】

当日の映像研修に基づいて、ルールの確認、見解の統一を測った。

『DB』・DB中の手具操作の繰り返しを見逃さないよう注意する。

- ・手具操作が正しく実施されていないものはノーカウント。
- ・0.3の誤差と0.5の誤差の見極め。

『R』・投げの高さ。中ぐらいの投げのものはノーカウント。

- ・空中下で2回の回転に不足がある場合、ノーカウント。
- ・1つのRで2個の0.2以上のDBが実施されていた場合R全てノーカウント。

『W』・DBの波動でもDBの要件を満たしていないものは無効。

【個人DA】

・事前のオンライン研修ではマークアップの内容を中心に確認し、大会前日の採点研修ではベース、
基準がルールブック通り正しく実施されているかの見極め等、目線の統一を図った。

- ・回転360°の有無についての見極め。
- ・視野外について、映像を見ながら有効・無効の確認を行った。
- ・DA一覧表より、ベースの確認（転がしが2部位転がっているか等）。ベースが正しく行われているか、そうでないかの見極めについて入念に確認した。
- ・基礎手具技術要素の確認。

【個人A】

【個人E】

事前のオンライン研修と前日の映像研修に基づき、マークアップの確認、ルールの確認を行っ
た。具体的には映像研修を行い、落下、移動、DB、DA、徒手の減点箇所を確認した。特にDBの減
点の確認、徒手については重心の高さの見極め、かかとの高さ、膝・つま先の美しさ等選手の質
の見極めについて確認し、見解を統一した。

【団体DB】

・ラーズの交換の見極め、Rと交換での回転要素の重複の確認、コンバイン難度の見極め、DBと
交換の数など、見解が分かれやすい部分の目線の統一とルール内容の確認を行った。

【団体DA】

- ・連係の関わりについての確認。
- ・シリーズ、通過基準の見極め。
- ・連係が重なっていないか、4秒を超えて手具なしの選手がいないか等、あり得そうな事象を出しな
がら見解を合わせた。
- ・投げの高さ距離について確認した。

【団体A】

映像研修で各項目に審判間の点数に相違がないか確認した。その後、再度各項目の確認を行った。

『動きの特徴』ダンスステップ以外の部分に音楽のキャラクターを実施できているか判断し、点数
化する。例えダンスステップが素晴らしいものでもそれ以外にキャラクターがなければこの項目の

減点の対象となる。

『ダンスステップ』は個別に評価される。そもそも構成にない場合も0.5の減点となるが、ダンスステップにキャラクターがあるかも重要なチェックポイントとなる。単純に手具操作を実施してリズムにあっていただけではなく、その音楽の特徴を手具と身体の動きで表現することが必要である。

『ダイナミックな変化』は個人では2回、団体では3回必要である。音楽さえ変化していれば減点がないのではなく、その変化を選手たちが動きで表す必要がある。音楽の変化の前後で選手の動きに変化があるのか見極めて判断する。

『身体の表現』難度や手具の投げ受けのためだけに身体を使うのではなく、踊りを表現するために全身を使用しているか。特に団体では5人全員でできているかを見ていく。

『身体・手具の効果』団体では2回のエフェクトが必要。音楽と一致させ、記憶に残る演技のハイライトになるようなもの。

『統一性・つなぎ・リズム』大きな落下などがあった場合、その現象についてはつなぎで減点するのではなく、統一性0.3減点で一括して減点する。ただし、リズムについては落下などで音楽と不一致があった場合、その度合いに合わせて減点を入れていく。

『共同作業』同時、カノン、コントラスト、コーラルがD要素以外で実施されているか判断する。コーラルは最低3つの異なる動きがあれば良い、カノンは全員が同じ動きであることを確認した。

『フロア面』団体では2つのD要素を超えて同じ場所にはいけない。

【団体E】

オンライン研修では団体ならではの減点項目を確認し、当日の映像研修では軌道の変更による移動や身体の質、DBの誤差の見解の統一を行った。

2. 採点上起こった事項とその処理

【個人DB】

【フープ・クラブDB】

『W』

- ・ルール of の定義に基づいて「頭から骨盤を通して足元まで連動しているか」を見極め判断し、Wが不足している場合には減点を入れた。
- ・新ルール2年目となりW(全身の波動)は形の見える選手が増えたように感じたが、まだ減点の入る演技は多かった。

『DB』

- ・コンバインDBを実施する選手で、手具操作のタイミングや身体難度の実施が甘くノーカウントとなることもあった。
- ・フープでは転がし(DAと兼ねたもの)が正しく実施されておらず、フェッテバランスではほかに操作がない選手も見られた。

『R』

- ・シリーズのRに挑戦している選手が多くみられたが、投げの高さが不足していたり、受けのタイミングや回転不足の場合はノーカウントとした。

【ボール・リボンDB】

『DB』

- ・0.2のフェッテにおいて手具操作を実施するタイミングで足が下がるなど、挑戦する選手が増えたことでノーカウントになる選手も多かった。
- ・後屈ジャンプが明らかに0.5の誤差が見られた。
- ・コンバインの2個目のバランスの静止不足が見られた。

- ・リボンの図形が不明確なものはDBノーカウントにした。
- ・ボールでパンシェバランス中のつきが膝下より低いものはノーカウントにした

『R』

- ・ボールでジャンプターンのRやもぐりのシリーズRで高さの不足が見られた。
- ・もぐりのシリーズRでは2歩の間ステップが理由で無効になるケースもあった。
- ・ボールの視野外受けや片手受けは正しくないものが多かった。
- ・リボンの受けで布を受けたものはノーカウントにした。

『W』

- ・甲座りを多くの選手が実施しているが、手具操作に追われ上半身の動きがなくただ座っただけの実施が多くその場合は波動としてカウントしなかった。昨年よりはカウントできる選手が増えた印象。

【個人DA】

【フープ・クラブDA】

- ・試合開始直後は少し審判間で点数が離れることがあったが、徐々に落ち着き、ノーカウントにした部分、グレーの実施で悩む部分、ノーカウントにする理由が揃うようになった。
- ・フープについては、2部位の転がしが不正確なものが多かった。また、転がっていないのか、ほんの少しだけはねただけなのかの判断が難しいものもあった。DAの基準でDBを実施することが多いが、DBのバランスの静止不足、カットジャンプがノーカウントになるなど不正確なものも多かった。フェッテローテーションの最後の回転でのDAで、回転終了後に投げていて不正確なことがあった。大きい投げからの転がし受けで、2部位転がっていないことも多かった。軸回しでのDAで身体の360度の回転が不正確であること、フープ自体が360度回っていないことも見られた。
- ・クラブについては、マークアップ掲載のクラブと手の内側での受けを実施していることがあり、ノーカウントとなった事例があった。頭の上での風車は視野外とならないが、おそらくDAとして演技に入れていると思われることがあった。パンシェバランスでの視野外での小円のDAで、視野外位置が不正確で、身体の横となっていることがあった。
- ・両種目を通じて、甲座り、後方転回での視野外受けの視野外位置が不正確であることが多かった。
- ・DAが21個入っている選手もいたため、総数のチェックは必要だと感じた。

【ボール・リボンDA】

『ボール』

- ・転がしについて、正しく2部位転がっている場合はカウントした。しかし、大きな2部位の転がしになっていない場合（手まで転がす予定が肘から落ちている、胴全体を転がす予定が胴の中心で終了しているなど）はノーカウントにした。
- ・視野外位置や回転の360°が不明確でノーカウントのものがいくつかあった。
- ・DB基準が不明確（バランスの静止、ジャンプの形）でノーカウントになるケースがいくつかあった。
- ・ベースと回転のタイミングが合っておらず、回転基準が切れてノーカウントになるケースが数件あった。

『リボン』

- ・リボンでは、らせんだけいのかきが弱くベースが不明確でノーカウントになるケースが多かった。
- ・垂直軸回転の360°が不明確でノーカウントのものがいくつかあった。
- ・脚下基準は「少なくともスティックが脚の下にあること」とマークアップに記載があるが、リボンのみ脚下で行っているケースもあったため、基準がノーカウントになった。
- ・ブーメランをする際に、リボンの裾を離してスティックを受けるケースがあったため、ノーカウントにした。

【個人A】

【個人E】

バランスの「最低1秒間の形の保持がない」-0.3の実施減点が多くみられた。他にもコンバイン難度の不正確さ、DAのためのDBとの組み合わせで生じた不正確による減点、手具操作の肘の曲がり、プレアクロバット要素の回転の歪みや姿勢欠点、難度中のそりの歪みなど、能力以上の演技構成や技術の未熟さによる減点が多く見られた。また、手具の基礎技術ではボールをつかむことが多く、クラブでは風車が正しく行われていないなど、DAのための演技構成が実施上減点に繋がるケースが多かった。また、リボンの一部が床に残る減点やWについてはほぼ0.1の減点があった。選手の競技中の様子から、ルールを理解して演技をしているかどうかも大切であると感じた。

【団体DB】

- ・波動は身体が連動していないことが多く、ノーカウントとなることも多かった。
- ・ドゥバンのフェッテローションで脚が下がる（誤差）ことが多く、5名全員が正しく実施できていないことがあった。実施する回転数が多いため、カウント、ノーカウントで点数が離れてしまうこともあり、判断も難しかった。
- ・ノーカウントとなったのは、構成上のミスは少なく、受けの基準を全員で同様に実施できなかったなど、当日の実施度に関することが多かった。
- ・DBの開脚の誤差で0.5の減点が入るためノーカウントとなることもあったので、DBの選択について見直しが必要と感じたチームもあった。
- ・手具操作の重複でノーカウントとした事例もあった。
- ・コンバイン難度の2つ目の形は、フォームが不正確であったり、静止のないことが多かった。
- ・DB中の手具操作が不正確な場合もあった。

【団体DA】

- ・特有の基礎手具要素がミスにより1名実施できず、不足の減点が入るケースがあった。
- ・連係の関わり方が明確になり、今までより見やすい構成が多かった。
- ・投げの高さ、距離については明確に行っているチームが多く、高さや距離が原因でノーカウントになるケースは少なかった。
- ・複数投げの際に、2個の手具が180度反対の方向に投げられていないケースがあり（片方が真上にかかる）ノーカウントにした。
- ・連係が終了する前に次の連係が始まってしまうケースがあった。
- ・通過、シリーズ、視野外手以外の基準については定義に沿って正しく行われたものはカウントした。通過する際に選手の足先部分を通過しているケースがあり、通過の基準はノーカウントにした。

【団体A】

- ・2難度を超えてその場にいる構成が数件見られた→0.3の減点
- ・ミスがない実施度の高い演技でも交換のために広がる、連係のために集まるなど構成上の減点が多い、また演技全体にテーマを感じにくい場合、芸術の減点は多くなった。
- ・選手たちの動きがはっきりしていると、ダイナミックチェンジや共同作業もはっきりと認識できたので、選手自身の個々の動き方は大変重要であると感じた。
- ・3回のダイナミックな変化が明確に認識できるチームは少なかった。

【団体E】

減点が多く発生した項目としては身体部位の不正確な保持、DBの誤差、バランスの静止、不正確な受け、不正確な転がし、軌道の変更による移動、手具の喪失であった。DBの誤差では主にジャンプ中の開脚や後屈の不足、フェッテターン中の脚の下がりなどで減点が入るケースが多かった。また、

転倒、手具や選手間の衝突が発生するケースがあり、その後起きた現象に減点を入れた。演技構成を新しくしているチームもあり全体的に実施度に差があったものの、一度に数個の手具が落下するような重大なケースはなかった。

3. その他特記事項・意見・感想等

【団体DB・個人フープクラブDA 佐藤なつみ】

今大会に審判員として参加させていただき、心より感謝申し上げます。

今回はDを中心に担当させていただきました。新ルールで2回目の高校選抜大会ということもあり、前年よりもルールが浸透し、様々な種類のDBに挑戦したり、上限20個に近いDAに挑戦したりする選手・チームも増えたように思います。まだ新シーズンの新しい演技構成となったばかりでミスが出てしまった演技もありましたが、今後夏の大会では、より仕上がった作品が見れることを楽しみに思っています。

最後になりましたが、開催県の静岡県実行委員会の皆様、高体連専門部の皆様、開催にあたりご尽力いただきましたすべての皆様に心より御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

【団体DA・個人ボールリボンDA 松田 桜】

今大会に審判員として参加させていただきましたことに心より感謝申し上げます。

コロナの規制が緩和され、久々に声を出しての応援を聞き、胸が熱くなりました。

個人では、ルールに沿って工夫された個性ある作品が昨年より多かったように思います。団体についても、テーマを持った作品が多く連係中も音楽を尊重する工夫が感じられ、高校生のレベルの高さを感じました。夏のインターハイではミスや移動が減ってさらに仕上がった作品になるのではないかと楽しみにになりました。

最後になりましたが、開催県である静岡県の先生方、全ての役員の皆様、高体連の皆様には準備から運営、片付けまで細やかなご配慮をいただきまして感謝申し上げます。そしてこのような大会に審判員として貴重な機会をいただけたこと深く御礼申し上げます。ありがとうございました。

【団体A・個人ボールリボンDB 栗原 悠】

新ルールで2回目の選抜大会でしたが、昨年はまだルール変更に伴い演技を整えるのに必死な様子を感じましたが今回はルールを熟知してより得点化できるように練習を積んで試合に臨んでいるのが伝わってきました。しかしその反面、同じような身体難度・R・DAが多く個性ある演技というものは少なく感じました。また身体の難度の精度は個人・団体ともに低下しているのを感じました。様々な影響で練習時間の不足など要因は考えられますが、もう一度身体の正しさ・美しさにも目を向けてほしいと感じました。

最後になりましたが、この貴重な場に審判員として参加させていただきましたこと改めて御礼申し上げます。開催県の静岡県実行委員の皆様、高体連専門部の皆様、試合運営・準備等本当にありがとうございました。この貴重な経験を今後の審判活動に活かしていきたいと思っております。

【団体E・久阪秋子】

今大会に審判員として参加させていただきましたことに心より感謝申し上げます。新ルールになって一年が経ちましたが、高校生がルールに対応しつつあり適応力の高さを感じました。中でも1つ1つの動作をゆるみなく大きさを伴って美しく実施しているチームもあり、高校生のさらなる可能性を感じました。

今回マスク着用ではありますが声援が可となり改めて声援が選手を支えるということを感じました。研修を入念に準備してくださいました鈴木先生、伊豆島先生、準備から大会運営に至るまでご尽力いただいた静岡県の皆様に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

【個人フープ・クラブDB 杉本友香】

個人、団体共にルール変更から2年目ということもありルールにのっとった演技構成が多くみられ、選手、チームのカラーに合った作品がそれぞれに感じられ、コロナ禍で頑張ってきた高校生たちの思いが伝わってきました。有観客での大会がこれからも多く開催され、選手には観客席からの応援を力に変えながら、その中で踊る幸せを感じて楽しんでほしいと思います。大会運営をして下さった静岡県の先生方、役員、生徒の方々、関係いただいた全ての方々に心から感謝申し上げます。そして今大会に審判員として参加する機会を頂けたことに深く感謝をし、これからも自己研鑽を積んで参りたいと思います。本当にありがとうございました。

【個人A 一瀬留美子】

【個人E 小寄さゆり】

上位選手、特に上位チームの演技が素晴らしく感動しました。実施ミスがあったもの、音楽の選択・動きの選択・表現の仕方等、ルールを熟知した演技でした。選抜大会というこの時期にこの仕上がりは素晴らしかったです。また、久しぶりの応援の声に、通常に戻りつつあることも感じながら採点業務に取り組みさせていただきました。どのチームも夏の全国高校総体に向けてこれから練習を重ねていくことでしょう。高校生たちの飛躍に期待しています。

終わりにになりましたが、大会開催にあたりご尽力いただきましたすべての方々に感謝いたします。特に開催地静岡県の役員・補助員の皆様、全国高体連体操専門部の先生方、審判業務を支えて頂いた日本体操協会審判本部の皆様、ありがとうございました。

【副審判長 伊豆島知佳】

ルールが変更されてから2度目の選抜で、前回の選抜はルールの分からない中、指導者・選手が探り探りでルールに則った演技をしていたのに対し、まだ技術は伴わなくとも、テーマに沿った演技、さらに論理的な繋がりにも工夫のある構成内容の演技もありました。

前サイクルでは、技だけを論理的にパズルの様に組み合わせていた演技でしたが、テーマに合わせた動きや身体全体を使った動きを入れることで、今のルールに合った構成になるということが少し浸透してきたと思います。しかし、難度だけを見ていると多くの選手・チームが同じような技を実施しており、まだ個性というものは出せるのではないかという伸び代を感じました。

今大会はコロナ禍になってから初めて、声出しでの応援が可能となった全国大会であったかと思えます。コロナ前は多くの選手・チームがお互いの演技を見て応援したり、感動を得たりと会場全体で試合が盛り上がっていました。まだ、そこまでの盛り上がりには戻っていませんが、選手同士で分かち合った感動はきっと次に繋がっていくものと感じました。

最後になりましたが、今大会の開催にあたり、静岡県の役員の皆様、高体連体操専門部の皆様、その他関係の皆様には大変お世話になりました。心より御礼申し上げます、本当にありがとうございました。

【審判長 鈴木あおい】

まずは、開催地静岡県また各地の沢山の方々の協力のもと試合が無事開催され、審判員として参加させていただけたことに心から感謝を申し上げたい。だいぶコロナの状況も落ち着いたとはいえ、恐らく練習が思うようにできなかった選手、チームもあったかと思うが、それでも選手たちのこの試合に懸ける強い思いを感じることができた試合となった。そんな選手や指導者の熱い願いや思いに対し誠実に演技と向き合い、正しい採点を心掛けた。

現ルールになってから2回目の選抜大会となったが、昨年から比べると更にルールを深めそれぞれの選手、チームが個を大切に、またそれぞれが現ルールと必死に向き合い、取り組んできたことが伝わってきた。しかしながら、DBの選択や手具操作、DAの組み込み方、団体の連係の方法、Rの投げや受けについて、同じものも多く、個人のDAにおいては種目によっては流れまで全く同じではないかと思うこともあった。また、どうしてもDが優先されるため、非論理的なつながりに

なってしまう場面も多々見られた。その選手、チームにしかない技の考案と共に、無理がなく音楽の特徴を生かしたつなぎを大切に、ここから夏の高校総体に向けて取り組んでいってほしい。高校生の無限の力と可能性に大いに期待したい。

最後になりましたが、今大会の開催にあたりご尽力いただきました地元静岡県の皆様、高体連専門部の皆様、大変なスケジュールの中を駆けつけてくださった長谷川副会長、その他関係くださった全ての方々に心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

以上